

天草方言で読む【竹取物語】

鶴田 功〈訳文〉

日本最古の口承説話 かぐや姫・天女伝説

竹取物語 〈原文〉

いまは昔、竹取の翁おきなといふもの有り。野山にまじりて竹を取りつゝよろづの事に使ひけり。

名をば、讃岐さぬきの造みやっことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。

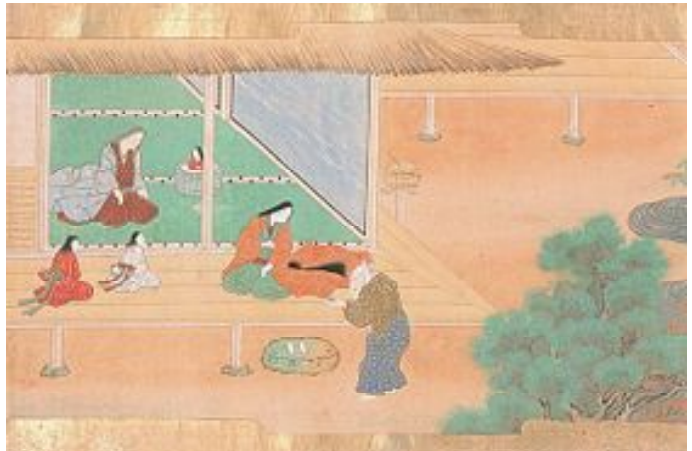
あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。

それを見れば、三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり。翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。

子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の女にあづけて養はす。うつくしき事かぎりなし。いとをさなければ籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹とるに、節を隔てちこよごとに金ある竹を見つくる事かさなりぬ。かくて翁やうやう豊になり行く。この兒、養ふ程に、すすくと大きになりまさる。

三月ばかりになる程によき程なる人になりぬれば、髪上げそうなど左右して、髪上げさせ、裳着もぎす。帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。この兒のかたちけうらなる事世になく、屋のうちは暗き所なく光り満ちたり。



〈意訳〉

今じゃ、だいぶ昔ン話じゃばって、〈竹取り爺さん〉ちゅう人しいのおらしたच्चゅた。毎日野山にひゃーって、竹取りしてにゃ、色んな物もんに使いよらした。そん人の本名は、讃岐さぬきの造みやっこちゅわすと。

ある日、竹バ切りよらしたりゃ、根元ン方の光つとる竹ン一本あった。不思議に思うて側に寄っていたりゃ、竹ン中ひそが光つとった。そりバゆう見れば、身の丈三寸ぐりゃん人が、どもこもみぞうか姿ひそで潜ンどんなさった。

そこで、爺さんが言わすとにゃ「私が毎日朝晩ずうっと見とる竹ン中におらすとじゃけん合点のいきやした。あなた様は当然私が生んだ子どもじゃなかばって、私が子どもになんなさる人じゃろう」ちゅうて、わーが手ン中ひそゃ入れて、家さん連れて帰って、女房の婆さんに預けて育てらした。

そん、みぞうさちゅうたら、この上無しじゃった。何せ、どもこも小こまかもんじゃって、籠ン中に入れて養い育てらした。

竹取り爺さんがこん子バ見つけてからは、竹バ取るたんびに、節バ隔てて、どん竹にも黄金が入つとった。こがん訳で、爺さんナだんだん金持ちにならした。

こん子は、養っていく内に、ずんずんふとうたこう成長した。三月ばかりのうちに人並み背丈ん女になったけん、成女ン儀式も万端手配して、髪上げバさせたり、裳着バさせたりした。

御帳ン中から外にも出さんごてして、大事に大事をとって可愛^{みそが}って育てとりました。処が、こん幼子ン容貌がなんさま清らかで美しゅうして、世間に較べもんがなか。家ン中は暗か処もなかごて、隅々まで光り輝いとっと。

爺さんナ、気分が勝れず苦しい時も、この子を見れば苦しさもふっとうだ。腹立たしかことも、こん子バれば慰めらるっと。

さて、爺さんナ黄金がはいとる竹を取ることが長こう続きました。そって富み栄えて豪華な長者にならしたげなですタイ。

そして一方、この子がずっと大きくなっただけん、三室戸^{みむろと}の齋部秋田バ呼うで名バ付けさせらした。

秋田は「なよ竹のかぐや姫」と名付けらした。

名付け祝いの前後三日間は宴バ催して、音楽バ奏でました。そして色々な管絃の催して男女の隔てなく大勢を呼び集めて、えらいナ宴会ぶりじゃった。

天下の男ちゅう男は、高貴な方もおろいか者も、どがんかしてこんかぐや姫バ手に入りたいもんだ、一目でも見たいもんだちゅて、評判バ聞きつけ思い悩んでおった。

ばって、その辺の垣根近くとか、近所に住んどる者でさえ簡単にゃ見られんとに、夜は眠えりもせえでにゃ、闇夜に出てきて垣根に穴バあけてあちこちから覗えたり垣間見したり、誰もが心乱しておった。

※ さる時よりなむ「夜這ひ」とは言いける。(そん時以来、〈夜這い〉ちゅうごてなった)

せめて、娘の家^{しい}ン人にことばの一つでん掛けたかともうても、うちおうてくれらっさん。

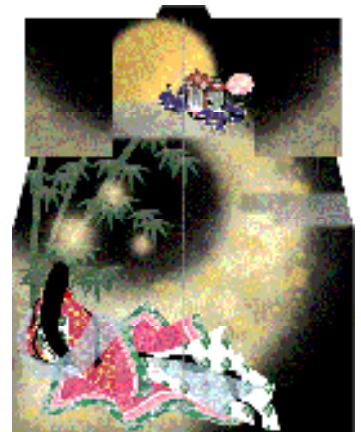
そって懲りでにゃ、そこば離れん公達があたりば彷徨^{さまよう}うて夜明かしする人ン増えてきた。

そん中でん懲りずに言い寄って来た者は、恋の通人ちゅわるる五人じゃった。石作りの皇子・車持ちの皇子・右大臣阿部の御主・大納言大伴の御行・中納言石上の麻呂の五人な昼も夜も、思い忘るることなく通い続けらした。

さて、かぐや姫が絶世の美女であることば帝^{みかど}がお聞き遊ばれて、内侍の中臣のふさ子に「沢山の人が命をかけて恋い慕っても、とうとう媾^あわでにゃ押し通したとかいうかぐや姫とはどがん女か、お前行って見てけ」

一方彼らがあきらめそうになかもんだけん、翁はかぐや姫に「女は男と結婚するもんだ。お前も彼らの中から選べ」と言わしたりゃ、かぐや姫は「なぜ結婚せんばんとじゃろうかい」と嫌がるが、『私の言う物バ持って来いければその人と結婚しましょうだ』と彼らに伝えてくだっせ」と言うた。夜になると、例の五人が集まって来た。翁は五人の公達バ集め、かぐや姫の意思バ伝えた。

その意思とは石作皇子には仏の御石の鉢、車持ちの皇子には蓬萊^{ほうらい}の玉^{ぎよく}の枝、右大臣阿



倍御主人には火鼠の^{かわごころも}裘、大納言大伴御行には龍の首の珠、中納言石上麻呂には燕の子^{つぼめ}安貝バ持ってこさせるといものじゃった。どれも話にしか聞かん珍しい宝ばかりで、手に入るっとは困難な物ばかりじゃった。

石作は只の鉢バ持ってたたてばれた。車持は偽物バわざわざ作ったが職人がやってきてばれた。阿倍はそれは燃えん物とされていたとに燃えてしもたけん別物じゃった。

大伴は嵐に遭うて諦めた。石上は大炊寮の大八洲ちゅう名の大釜が据えてある小屋ン屋根に上って取ろうてして腰バ打ち、断命した。結局、誰一人として成功せんじゃった。

そんな様が帝^{みかど}に伝わり、姫に会いたがった。喜ぶ翁の取りなしにも関わらず、彼女はあくまで拒否を貫いたばって、不意をついて訪ねてきた帝に姿バ見られてしもた。ところが一瞬のうちに姿バ消して地上の人間でなかところバ見せて、結局帝をも諦めさせた。

ばって、彼と和歌の交換ナするごてなった。

月さん帰って行くかぐや姫

帝と和歌バ遣り取りするごてなって三年の月日が経った頃、かぐや姫は月バ見て物思いに^{ふけ}耽るごてなった。八月の満月が近づくにつれ、かぐや姫は激しく泣くごてなり、翁が問うたりゃ「自分はこの国の人間ではなか月の都の人であり、十五日には帰らんばん」という。それバ帝が知り、翁の意バ受けて、勇ましい軍勢バ送るごてなった。



そして当日、子の刻頃、空から天人が降りてきたばって、軍勢も翁も姫も戦意喪失して抵抗でけんまま、かぐや姫は月さん帰ってはってく。別れの時、かぐや姫は帝に不死の薬と天の羽衣、帝を慕う心を綴った文バ贈った。

しかし帝はそれを駿河国の日本一高っか山で焼くごて命じた。それからその山は「不死の山」(後の富士山)と呼ばれ、その山からは常時、煙が上がるごてなった。